今月のひと

駄菓子屋ひびのば
清水 磨弥さん・25歳

駄菓子がつなぐ居場所づくり

大学生や社会人が集まる場での会話をきっかけに、市内で駄菓子屋を中心とした取り組みを進めている清水さん。市内の大学に通い、卒業後は一度上京して就職。経験を積んだ後、Uターンして大好きな群馬に戻ってきた。

活動の原点にあったのは、「世代を超えて、自然に人が集まれる場所があったら」という思いだった。誰もが一度は手にしたことのある駄菓子に、人の距離を自然に縮める力を見いだし、こどもだけでなく、高齢者や学生、障害のある人も、気負わず立ち寄れる居場所を目指してきた。

現在は南町や千代田町などにある実店舗に加え、移動販売やイベント出店など、地域に合わせた形で活動を展開。学生が主体となって運営に関わり、企業に駄菓子を届けるサブスク型の取り組みにも挑戦している。

「一人の考えというより、みんなのアイデアで進めてきました」

イベントでこどもが販売を体験し、大学生が企画に挑戦する。その様子を地域の人が温かく見守る光景が、少しずつ見られるようになってきた。

90歳代の来店者が訪れたこともあり、世代を超えた会話が自然と生まれる。間違いや失敗も受け止め合える空気を、この場所で大切に育んでいる。

活動の根底にあるのは、「誰かの居場所になれたら」という思い。人と人をつなぐ歩みは、着実に続いている。

未来につなぐスロー

第1回 時沢大根復活プロジェクト

問 広報ブランド戦略課
TEL 027-898-6971

スローシティ前橋・赤城エリアの未来に残したいものをテーマに本コラムを掲載します。

「時沢（ときざわ）大根」は、歴史の中で磨かれてきた最高峰のブランド大根です。

そのはじまりは江戸時代、沢庵和尚が当時の前橋藩主に大根づくりを勧め、栽培を奨励したことにあります。藩内各地から集められた大根の品評会で不動堂村（現在の富士見町時沢地区）の大根が第一位に選ばれ、時沢大根として名を広めました。

しかし現在、時沢大根の生産量は極めてわずかです。高い評価と需要がある一方で、担い手不足が大きな課題となっていました。直売所に並べば即完売、県外から買い求めに訪れる人もいる中、「つくり続ける人」が足りない状況を何とかできないか。そんな思いから始まったのが「時沢大根復活プロジェクト」です。

1月8日には安楽寺不動堂の縁日に合わせ、時沢大根の奉納が実現しました。さらに2月26日にはプロジェクト関係者が集い、農業法人こうづけの里代表の

嶋崎剛志さんが活動を紹介しました。

同プロジェクト会長・奈良清さんは「地域からもう一度、最高レベルのブランドを育てていきたい」と語ります。

今後の大きな目標は、令和11年に予定されている不動明王像の30年に一度の御開帳に合わせた時沢大根奉納祭りの実現、そしてふるさと納税返礼品への申請です。そのためにも、より多くの人に時沢大根の魅力を知ってもらい、担い手や応援者として関わってもらえたらと期待を込めます。

奈良さんの大きな夢に向け、自治会や寺院、地元の商工会や農業法人など、多様な主体が連携しながら、時沢大根の生産継続と価値向上に向けた取り組みが進められています。

時日時 場場所 対対象 ¥費用 持持ち物 申申し込み 問問い合わせ

CITY フォーカス

本市のイベントや事業などを紹介

親子で多彩な競技体験

5月3日、市スポーツ協会創立80周年記念事業として、まえばしスポーツフェスティバル2026 with チェアリング in MAESOUを前橋総合運動公園で開催しました。熱気球搭乗体験や早朝ヨガを実施。また、50m走やテニスなどを体験すると、抽選でもらえるドロップシール企画も大好評でした。

文字から読み解く朔太郎

3月21日から5月24日まで、萩原朔太郎の生誕140年を記念した前橋文学館の企画展「悪筆。文字書体をなさず。冷汗冷汗。―萩原朔太郎と文字」を開催しました。朔太郎の書く文字に着目し、直筆の原稿や手紙などを展示。自らの字を「悪筆」と称した朔太郎の文字から人物像や作品に迫りました。

赤城神社5月の風物詩

三夜沢赤城神社（三夜沢町）の参道松並木でヤマツツジが開花。訪れた人はクロマツやアカマツの深緑とヤマツツジの朱色のコントラストを楽しみました。5月5日には上泉伊勢守杯・赤城神社奉納武道大会を開催。赤城神社の境内で小学生が空手と剣道で日頃の鍛錬の成果を競いました。